

山本家の墓地

一九八八年九月のある日、同志社高等学校の田中久雄校長さんから電話がかかってきた。用件は、「山本家の墓地の調査のため、来る十月三日に、同志社から総長を含め五名が会津若松を訪問するので、山本家のゆかりの地の道案内をお願いしたい……」であった。

当日待ち合わせのホテルへ、川上盾会津若松教会牧師と、同志社卒業生の児玉佑子さんと共に訪ねると、松山義則総長、田中久雄校長、園部望庶務部長、河野仁昭社史資料室長、幸亀一夫総長秘書の五名がロビーで待っており、挨拶を交わし、案内する山本家のゆかりの地の打合せをすませ、ホテルを出発した。

五十嵐勇作

最初に訪れたのは、戊辰戦争以前に山本家の住居があった所で、現在その敷地には、宮崎十三八氏（会津史学会会長）が住んでおられる。宮崎氏から、江戸時代の若松城下の古地図に基づいて、当時の山本家の屋敷跡、戊辰戦争の状況などについて詳細な説明を聞いた。

このことが、端緒となり、後に宮崎氏の庭前に「山本寛馬・新島八重生誕の地」記念碑（一九八九年五月三〇日建立）が建てられたことは、会津にとっては、此の上ない喜びであった。

宮崎氏宅を辞去して次の目的地、一ノ堰の光明寺の山本寛馬の父が眠る山本権八の墓所

へと向かった。

一ノ堰は、戊辰戦争のとき、東西両軍の激戦地の一つであり、山本権八は、この地で一八六八（明治元）年九月一七日討死した。

権八の討死の二日まえ九月一日には、この地付近で東西両軍の激しい戦があり、会津側の指揮官の一瀬要人（藩老）が重傷を負って、その後に死亡している。西軍もこのとき痛手を受け、翌翌日の一七日の西軍の作戦は、さらに綿密な計画のもとで行われた。この辺の事情については、大山柏著（山川捨松の子）『戊辰役戦史』（下巻二一―二二六頁）に詳述されている。

このように山本権八は東軍の不利な戦いにもかかわらずの討死であった。

山本権八のお墓の向って左には一瀬要人の墓石、そして右側には数名の同僚の墓石が並んでいた。山本権八の墓前で、田中久雄氏のお祈りで一同お参りをすませ、一ノ堰にお住まいの、佐藤正信氏から一ノ堰の戦いについて、お話を伺った。

次に旧市内に戻り、会津藩校「日新館」跡を訪れた。ここは山本寛馬が江戸で蘭学を学び、会津に帰り、日新館教諭となり、また蘭

学所を設け教授となり藩の若者を教えたところでもある。現在「日新館」の名残りを示すのは、天文台跡のみである。

天文台跡の近くにある山鹿素行誕生碑を過ぎ、会津若松教会へ赴く。この教会は、兼子重光牧師をはじめ、同志社出身の方が主に牧会された教会である。教会のすぐ西隣にある若松賤子の碑を見て、郷土料理の田季野で昼食後、浄光寺にある今泉岫雲のお墓へ向う。

岫雲は今泉真幸の父君である。今泉真幸、兼子重光については、拙稿「会津の同志社人」(本誌第八十六号、一九八九年三月一六日発行)でふれたので省略する。

次に山本家累代のお墓のある菩提寺大龍寺へ向かった。大龍寺は市街地の東郊、飯盛山



山本権八の墓碑

の山麓を東山温泉に向う道路の東側にあり、山号は臨済宗宝雲山で京都妙心寺の末寺である。

大龍寺は、保科正之が羽州最上より会津へ入府した一六四三(寛永二〇)年の時に機外昭鑑禪師が開山した寺で、本堂の裏には、目黒浄定が造った庭園が広がっている。

この寺は、保科正之入部前は、慶山(桂山)寺と称され廃寺跡であった。

墓所内には、小笠原長時(武家礼法小笠原流の祖)はじめ安藤有益(和算家)、林権助(外交官)など有名な人のお墓があり、戊辰戦争の殉難者・殉節者七一名のお墓もある。また、会津藩主松平容保の嫡子容大（おほ）の出生した寺でもある。

本堂より北側が墓地になっており、山本家の墓地は墓地の北隅に山本家の墓石七基がある。その左はしに墓標が建っており、碑には「山本家之墓所 昭和六年九月合葬 山本権八、女 京都住 新島八重子建之 八十七歳」と刻まれている。

この墓標は、今を去る六一年前に新島八重子が故郷用会津に墓参りに来た時建てたものか、八重子が京都から大龍寺に墓標建立を依

頼したもののかその経緯は詳らかでない。

山本家の墓地については、本誌第八十八号で若月健悟氏が「会津・こころの郷里」でも述べておられるが、今回の訪問で住職増子大導師は、「山本家の累代の墓はもともとと散在していたのを、小笠原長時殉後四百年忌に小笠原家の墓所が大改葬されたとき隣接していた



一ノ堰光明寺の墓地

山本家の墓石をやや三角形の土地ですけれど現在の所へ石垣を積んで移しました。八重子さんが墓標を建てて以来、山本家の方のお墓参りは絶えています。しかし、山本家は会津若松史に、その名をとどめる家柄ですから大切にしております。」と話されて、このたびの同志社からのお墓参りに感謝をされた。墓地の西端には無縁の墓碑もひとまとめに積まれていた。

山本家の墓は次の六基で死亡の年号の古い順に碑文の通り記すると、

修功自徳居士 山本平左衛門良金墓 寛政三年（一七九二）辛亥八月五日

鏡空智円大師 山本平左衛門良久妻 有賀円治満吉女 文政元年（一八一八）戊寅十二月六日

秋雲宗鉄居士 山本吉次郎 文政十二子年（一八二八）八月晦日

□足院華山閑夢居士 天保子年（一八四〇）九月二十二日



山本家の墓地（大龍寺）

佐平良重墓 弘化元年辰辰（一八四四）十月九日

山本佐平良重妻之墓 慶応二年（一八六六）丙正月十一日

私たち一行は増子大導師のご配慮に対し深謝し、次の目的地飯盛山へと向かった。

飯盛山の白虎隊記念館では、早川喜代次館長から徳富蘇峰を中心としたお話を伺った。氏には『徳富蘇峰』の著書がある。白虎隊記念館を後にして、日新館が復原されている河沼郡河東町へと向い見学後、福島県立会津短期大学の高瀬喜左衛門学長と内海健寿教授を訪問した。

内海教授は、会津のキリスト教の研究家であり、『会津のキリスト教』（一九八九年五月）の著があり、また、山本寛馬、デフォレスト、井深梶之助、兼子重光、山川捨松、若松賤子、梶原長八郎、坂田裕などの先覚者を研究されており、高瀬学長は、京都大学で物理学を専攻され、松山総長とはもっぱら京都の話をされた。

夕方は、ホテルで喜多方市から同志社卒業

生の村沢道郎氏、小野信正氏と若松栄町教会牧師高橋力氏も加わって夕食会がもたれ、なかなか懇談の一時を過ごした。この時、私は京都と会津が深く結ばれた感を深くした。

その後、私は山本家の墓地には墓石が六基あるが、その続柄がどうなっているのか気になりだし、会津若松市立会津図書館へ出かけて調べてみた。閲覧の人に頼んで『諸士系譜』という毛筆の古書のコピーを見せていただいた。会津藩士の各家の系譜で三四二冊からなり、これは、天保四年に会津藩庁で編纂されたもので、別にイロハ順で索引があり検索は思いのほか容易であった。

これによると、山本平左衛門家系譜なる見出で「姓は源、本国は近江、定紋は丸内四ツ目結」とはじめに記され、初代以下次のように記されている。但し個人毎の略歴は省く。

(一) 内は生没

第一代 山本佐平良永（貞亨三年——宝

暦二年） 山本道珍良次二男

第二代 冲右衛門良走（よしのぎ享保十年——宝

暦五年） 実父は大谷重大夫

第三代 平左衛門良金（享保十七年——

寛政三年） 実父は坂惣右衛門

第四代 平左衛門良久（宝暦十一年——

—

第五代 権八良高（安永九年——明治元

年） 実父は三宅治兵衛重威

その四男

第六代 繁之助（文化六年——）

実父は永岡藤助久武 その四男

妻は権八良高女

以上の『諸士系譜』の記事は文政六年（一八二三）までである。それ以後のことは記されていない。山本覚馬は文政十一年（一八二八）生れるため、『諸士系譜』には記載されていない。山本良金から大龍寺が菩提寺で、それ以前は例えば第一代山本良永は江戸渋谷長国寺、その後は、若松の浄光寺となっている。浄光寺を訪れてみたが、墓域が整理されていて、無縁のお墓そのものもなかった。

同志社から総長一行が会津若松を訪問され

たのは、山本覚馬・八重兄妹の先祖に対する敬意の表れであり、意義あることで会津に住む基督者として私は感を深くした。

また、このことにより、新島八重子は没年の前年に山本家の墓標を建立したことを始めて知り、六十余年前の八重子夫人の会津に対する思いをあらためて知った。

（郷土史家）

バスや電車の中で

我が家から田辺校地までの通勤時間が一時間半かかるということが、日本全国のサラリーマンの中で平均以上の時間なのか、以下なのかは知らないが、一時間半というのはかなりまとまった時間であることは確かである。今出川校地へ通っていたころは何時も自転車だったから、せいぜい十五分だったことを思えば隔世の感がある。

しかしである。痩せ我慢ではないが、自転車の十五分はひたすら安全に走り抜けることに全てを集中している。つまり、頭の中をそのことだけが占めているのであって、他のことを考えている暇はない。ところが一時間半の通勤となると、バスや電車の中でいろいろ

薬師川 虹一

感じたり、考えたりできるのである。思えばこういう何もしない、いや、何もできない、時間をまとまって持つということは生まれて始めてのことのようである。ひたすら走る空白の十五分は、確かに爽快であるが、ひたすら他人まかせで揺られている一時間半も、楽しいものである。

例えば、朝二講時から始まる時間は丁度市バスは通学時間帯であって、少し離れた国立小学校へ通う子供たちが沢山乗っている。この子供たちには二種類あって、一つはひたすら本を読んでいる連中である。学校図書館から借りてきたらしい、良書を賢い顔で読んでいる。間違っても紙質の悪い——と言っても

私の学生時代はもっと悪い紙だったな。亡くなられた貞方敏郎先生の高等英文法の名著は、紙が悪くて書き込みが出来なかった——劇画雑誌など見向きもしない、といった風の子供たちである。この手の子供たちはきつと御両親、特に、お母様の言いつけをよく守り、スポーツ教室に、音楽教室に、その上絵の教室にまで通い、夜は家庭教師が来て……といった生活で、文武両道の達人になるはずの子供たちなのだろうと思う——仲々そうはいかないのが世の中なのだが、などと思うのは失礼千万なのだ。

も一つのグループは、どこから見ても汚いシャツを来て、汚い袋を背負い、汚い顔をした連中である。綺麗な女優さんが宣伝している洗剤で洗ってやりたくなる子供たちが、群れを成して騒いでいる。奇妙なことに眼だけは子供の野獣のように可愛くて、清らかで、生き生きとしている。そして、見ていると思はずこちらの頬がほころんでくるほど精悍な面構えをしている。この子供たちも多分、家に帰るといろいろなお稽古事に精を出しているのだろうが、バスの中では何時も必死の形相で遊んでいる。「軍艦・破裂・沈没」という、

勇ましい遊びである。ことわっておくが、これは軍国主義の復活とかPKOとかとは何の関係もない。このグループには必ず大將格の子供が居る。だが、この大將、はなはだ民主的で、スポーツマン精神にあふれているから面白い。どうやら軍艦になって三回続けて勝つと大將になるらしく、大將になった奴と勝負する時は「おねがいます」と挨拶をしなればならない。それを忘れると大將にこっぴどく叱られて失格するらしい。餓鬼大將が挑戦者になった時が面白い。全身に闘志を漲らせて「おねがいます」と頭を下げている彼には浪花節が一番良く似合う。この子供たちが大学に入ってくる時まで、この漲るばかりの迫力が光り輝いていくれますようにと祈らずにはいられなくなる。この子たちもひよつとすると、バスの中だけが自由なのかもしれないのだ。子供は汚いのが良い。埃と廊下の油の匂いの染みついた生き物が子供なので、染み一つない子なんて子供じゃない、などと想いながら、くる日も、くる日も棒切れを振り廻し、自雷也ごっこに明け暮れていたころを思い出すなんてことは、十五分の自転車通勤ではできない相談である。

バスを降りると今度は電車である。直通の各駅停車で約五十分。これはくつろげる。ここには小学生はいない。我らが母校同志社大学の学生を始め、女子大生から沿線の高校生が中心である。こんな時間なのにサラリーマンも乗っている。だが何と言っても主役は、あの馬鹿でかいスポーツバッグである。一体何が入っているのか、今だに謎である。当方の娘や息子が学生の頃は、あんな他人迷惑な袋は流行っていなかった。せいぜいここの年かそこらのことではなからうか。戦争前から知恩院さんの前にあったズック屋さんのズック袋がブランド物になって驚いていたが、近ごろはリーボックルかコロボックルかしらないが、松ぼっくりのような名前のブランド物が袋の世界を支配しているようだ。おまけにそれを団栗のような連中が担いでいると、笑うなど言う方が無理というものだ。あんなのは荷物料を取ればいい。そうすれば少しは車中も冷しくなるのではないか。でも、まあ良しとしよう。容れ物は大きい方がよい。大きい葛籠を選んで損をした婆さんの話は今では通用しない。大学の先生方だって容量の大きいパソコンを競って買い求めてられるご時勢

なのだ。容れ物が大きければそれだけ沢山のものが入るはずなのだ。入れる、入れないは別のこと、入れれば良いというだけでもない、などと憎まれ口を叩く気は毛頭ない。だが、邪魔になることは理屈抜きで確かである。しかも、あの坐り方だ。昔は小学校に入ると、一年生の教室の黒板の上に、正しい坐り方の大きな絵が貼ってあったものだ。ハウ・ツイ物が流行ったことがあるし、今でも論文の書き方という本があるのだけれど、生活の基本になるハウ・ツイは何処でどうして身につけるのだろう。大学で、電車の乗り方、電話の掛け方などを教えねばならないのだろうか。そんな学生さんにも近頃ちよつと変化が見えてきたように思える。袋は相い変わらず大きいけれど、そこから引つ張り出すのが例のカシヤカシヤ虫の髭ではなく——カセットプレーヤーのコードのことである、念の為——何と、活字の詰まった文庫本なのである。学生さんといえどもカシヤカシヤ、手もとでは平均四秒で二頁を見る、劇画雑誌と思いきや、何と昨今の学生さんは文庫本の活字に目を向け始めたようである。教室へ行っても文庫本を読みながら待っている。試験の監督を

しても、ちよいと拾い読みしてみような雑誌は姿を消した。たとえ、傾向だけでも、これは嬉しい傾向である。勿論、実態は余り変っていないようである。英語の授業で、当てられた所を英語で読んで、訳本では次のパラグラフを平気で読んでいるのは此の際不問にする。問題は、漢字が読めないことにある。切角、傾向としては活字に戻っているようであるにも拘らずである。

先日、教室で学生さんが一生懸命に英語を訳しているように聞こえる、たどたどしい日本語を操っていたが、突然「ナマガキノムコウニ……」と言ったので、たどたどしく歩いていったのが、はたと止まってしまった。何故今「生牡蠣」なんだ。「夏に生牡蠣は危ない」と思ったが、どう考えても生牡蠣の出でくる場面ではないので、よく読んでみると、それは「生垣」を「ナマガキ」と読んでいることに気づいた。確かに、マンション住まいでは「生垣」など生活感覚の中に存在しないのかも知れない。生活実感の無い所にも、もつと目を向けてくれば、あの馬鹿でかい袋も豊穡の角笛のようになるだろうに、と思うが、「生垣」が彼にとって無意味であり、従って読め

なかったのは、私にとってロムやビットなどが言葉と思えないのと同じだと思うと、段々自分が貝になっていくしか仕方ないようである。ともあれ今は、活字回帰の傾向を素直に喜んでおこう。

ところで、バスも電車も同じように、シルバーシートと言って鼠色した座席が設けられている。郊外電車では、これは殆ど無視されていて、自然に扱われているが、市バスでは凄く独自性を主張している。ラッシュ時でも、その一画だけは涼し気に空いている。積み残しの客が何人もいるのに、である。お年寄りと身体の不自由な人の優先席だから、いつも空けておかねばならないのか。それ以外の席なら譲らなくてもよいとも言うのだろうか。笑えるのは、遠慮して自分は坐らず、件のデカ袋を置いている学生さんである。そんなら自分も坐ればよいのに……。

色を変えて優先席だと指定されると、状況に対する主体的な判断力を一切停止してしまう。従って色で区別しない席に坐っていると、同様に状況に対する主体的な判断を停止して、一切席を譲る気配も示さない。こう書く、「主体的判断」なるものがあつて、或る

場合、それを一時、停止する、ように聞こえるが、そんな簡単なものではないような気がするのである。どうもシルバーシートというのは、譲る気持ち無くさせて、物理的空間を確保すればよい、という気風を助長させているように思えてしかたがないのである。近頃はわざわざ人混みを掻き分けて、「すみません、すみません」と言いながら、シルバーシートに坐るようにしている。我ながら、馬鹿々々しい所業だと思いつつも、これも歳のせいかもしれないと苦笑しているのである。こんなことも自転車通勤では考えつかない楽しみであろう。やれやれ。

(大学文学部教授)

保山の修次ほうざん しゅうじ

生きられなかった人生ということを近ごろしきりに考える。ここに去年の夏死んだ或る友のことを書くかと思うのだが、なぜ書いておきたいのかと考えてもじつのところよくわからない。どうやら、この生きられなかった人生とかに妙にこだわる心となにか関係があるらしいとぼんやり思うくらいである。断つておくがぼくはよく自身の生きられなかった人生にこだわっているのである。

かれとはとりたてて親しかったわけではない。むしろ正確に言えば、嘗てほんの短い間友らしきものであった男、である。二人の間にとくに忘れ難い劇的なことがあったというのでも——いや、そういえばその死がいく

山本雅昭

らか劇的だったといえなくもないかもしれない。かれは拳銃で撃たれて死んだのだ。もっとも、それが日常茶飯の世界だつてあるのだから、かれがはたしてほんとうに劇的な死を死んだといえるのかどうか。しかしぼくのようなものには知人のそういう死に方は、やっぱり、日常をだいぶん超えた出来事である。新聞には××組組員坂上修次と出た。あつ保山の修ちゃん、と気がついた瞬間もうかれこれ二十五年になろうかという古い記憶が蘇ってきた。

「山本やろ？」さつきからいちばん奥の卓でちらちらこちらに目をやっていた手拭鉢巻の男が便所の帰りに対面の背中越しに声をかけ

てきた。「なんや修ちゃん、知りあいかな」「こっちや見たとこマジメな学生はんだつせ。あ、それボンイこか」「なんせ修ちゃんは顔広い」ぼくは曖昧に笑つて応え、誰もみな顔もあげず手もとめずただ言葉だけが飛び交つて、男はすぐまた自分の席に戻つていった。その日も十時ごろにはぼくは立ちあがつた。千日前へでもと思ひながら宗右衛門町を太左衛門橋から相合橋の方へぶらぶら歩きかけるとふいに肩を並べてきたものがある。「どやってん？」手拭鉢巻だつた。「坂上か」「けつたいなところで会うなあ。よう来んのんか、あこ」「いやあ、ぼくの腕じゃちよつとキツイ」「あの向かいの串カツ屋の上、あこやつたら甘いのもおるで」「知つてる。けどおまえ、いま……」「保山や」「保山て、銀杏通りの？」「中三やつたか、あの、おまえの家の前で会うたん。あれからあの仕事よう呼んでもろてるうちにあんじよう若いもんになつてしもた」そういつてかれはすしし得意げだつた。小学生のころぼくらの町と隣町とを隔てて銀杏通りというかなり大きな道路があつた。ぼくの家の裏の路地を三分も歩くともぐその通りに出、その出た所に天保某というのが土木建築請負業

保山組という看板を出していた。粋いっぱい
に⑧と抜いた磨りガラスの大きな四枚の引き
戸を閉てきつた堂々たる表構えは、昭和二十
五、六年のあの辺りのみすばらしい家並みの
中でひとときわ異彩を放っていた。じつさい土
建の保山といえばなかなかの顔役だったらし
く、周りのおとな達の話では、警察でも消防
でも埒があかないモメ事はたいがい保山へ持
ちこまれ、するとそれがまた不思議にたちま
ちカタがつくというのである。子ども心にな
にやら深く印象づけられるものがあつた。い
や、ほんとうに強烈な印象はほかにあつたとい
うべきか。夕がた近所の銭湯にいけばたい
てい三、四人は保山の若い衆にあう。かれら
は湯を出ると背中や両肩二の腕の自慢の彫り
物を誇示するように鏡の前に立ち並び、ひと
しきり談笑してから縮^{ちぢ}のシャツにステテコ姿
で颯爽と帰っていくのであつた。風呂屋の入
口に入れ墨の方お断りなどという貼紙のなか
った時代である。むろんどこかの工事現場に
でもいけば唐獅子や不動の刺青などいくらで
も見られたが、上気した若い男の肌に浮きあ
がる紅を刷いたようなくらいからもんもんはま
た格別の美しさだつた。ぼくはいいつも息をの

んで眺めたものだ。修次のように腕力の強い
少年がもつと激しい憧れや羨望を胸の裡にた
ぎらせていたとしてもすこしもおかしくはな
い。坂上修次とは小学校の最後の二年間同じ
クラスだつた。からつと陽気に振舞つたが性
粗暴であつた。喧嘩が強くて、しかもいつた
ん堰をきると相手を打ちすえるまでおさまら
ないちよつと狂気じみたものを持ちあわせて
いた。だからであらう、乾分がなく、騒ぐと
バカに賑やかだが知らぬまに遊びの輪からは
ずれていることも少なくなかつたように思
う。相撲が好きだつた。相撲だからみなが安
心して全力でかれにぶつかつていき、かれも
喧嘩でない分かえつて手加減なしに力が出せ
たのか思うさま相手を投げ転がしては屈託な
く大声で笑つたりした。負けただけはよくこ
こしていた。そういうときだけかれはぼくら
みんなのヒーローだつた。きつと、いつか単
純明快に腕力だけがものをいう世界で存分に
羽をのばしたいとひそかに夢見ていたにちが
いない。はたして中学三年になつたばかりの
或る日、ぼくの家の表の空き地で壁土を捏ね
ている坂上と再会した。「あれっおまえこんな
とこに？」小学校を出る直前にぼくは昔いた

町の隣の、そのまた一つ隣の町に引越して、
ちがう区域の中学校に入つたばかりは、だか
ら以来つきあいがなかつた。上半身裸にニツ
カポツカと地下足袋のかれは相変らず痩せて
はいるものの遅しく、もうすっかり一人前
のおとなに見えた。「ばあちゃん死んで去年から
左官のてつ、たいや」という。祖母との二人暮
らしは知つていたが親兄弟のことはなにも知
らない。尋ねたこともなく、向こうから話し
たこともない。たつた一人の身寄りもなくし
たかれがそのときどう暮らしていたものか。
しかしなにがどうあれ、当時かれがすであ
る。の世界に一步近づいていたことは確かであ
る。

道頓堀川を渡つた端^{はな}でビールを飲んで、そ
の夜は終わった。なにかあるとすぐ燥いだけ
れのことだからたぶんいろんなことを喋つた
だろうが、さっぱり覚えていない。三年の夏
休み以後まる一年大学とはまったく縁の切れ
ていたぼくは、毎日ミナミやキタの盛り場へ
出かけては日がな一日帰らなかつた。呆^{ほう}けて、
映画と麻雀にのんびんだらりと日を送つてい
たのである。翌日から続けざまに一週間例の
串カツ屋の二階へかよつた。二、三日おきに

かれは姿を見せた。八時過ぎに顔を出して一時間、長くて一時間半ほど打ってさつと引きあげていく。よくフリこみ、それに倍してよくアガる力ずくの派手な麻雀だった。うるさいほどによく喋り笑いまくって常連の客がみな喜ぶから、ふつうならその風体でちよつと嫌われるところを、店主も大目に見ているようだった。たまに知らぬ顔が眉を顰めると、保山の修次やが、とわざとそつちを振り向いたりもするが、まず、剽軽で愛敬のある人気者として修ちゃん修ちゃんとおおいに可愛がられていたのである。「おう、今日はどや?」「あかん」たつたこれだけの言葉を交すためにぼくはほとんど三日にあげず出かけ、ここそこのぞいてまわつた。会って話しこむでもなし、いっしょに飲みに出るでもなし——あれはいつたいなんだつたのだろう。

十月の終わり、川の畔の夜から二月ばかりたつたころ修ちゃんから妙なことを頼まれた。婚姻届に証人の判を押せという。いっしょに暮らしている女性に子どもができたので、「しゃあないがな、ヤイヤイいいよるし」というのである。大丈夫か、と喉まで出かかつてすぐその間抜けさに気がついた。ぼくは

改めてかれの真つ黒な顔を見直さないわけにはいかなかった。十年前左官の追いまわしの少年の中に見たおとなの男の、その何倍ものおとなの男を見たと思つた。「これ、組の兄貴、こつちへおまえの名前と判コ頼むわ」藪から棒だったが、なにも聞かずに名前を書いた。印鑑がない。「かめへん、わしがそこらで買つて押しとこ。おおきに」と、照れてちよつぴりおどけてかれは紙片を押し頂いてみせた。わけもなく嬉しい気持と激しい嫉妬の、ぼくは挟み撃ちにあつていたと思う。それにしてもいつたい届けはほんとうに役所に出されたのだろうか。ほどなくかれの姿がふつり大阪の町から消えた。ぼくもまた急につまらなくなつたそれまでの暮らしから足を洗つて大学に帰つていつた。

かれとはそれきりである。じつをいうと、新聞の男がぼくの知る修次と同じ人物かどうか確かめたわけではない。ぼくはただ記事にあつた左官という職業と、ぼくと同じ年齢と、深夜の盛り場で撃たれたというその死にざまとからかつてにそうときめこんでいるだけだ。保山ではない、××組の坂上修次である。だからあるいは保山の修ちゃんでないのかも

しれない。保山の修ちゃんはいつまでも保山の修ちゃんのまま、どこかで相も変わらなず傍若無人に騒ぎまわり、そしてへらへらとんきに生きちらしているのかもしれない。だいいち、そんな犬ころが蹴殺されるような死に方をするには歳を食いすぎているはいしなしか。それでも——それでも新聞を読むなりとつきにそうきめてしまつたのは、そうした最期であつたとしてもすこしも不思議はないという思いのほかに、かれには悪いが、保山の修次はせめてそんな風であつてほしいというなにか願ひみたようなものが、それまでずつとぼくの心のどこかにあつたからでは、といま思うのである。そしてそれは、まだ、ある。いよいよ強く、ある。

(大学工学部教授)

わが懐かしのボストン

——ユング心理学と私が出会った町

樋口和彦

このたび、はからずも新島襄生誕一五〇年記念講演会ということでこの九月十九日と二十日の両日、新島襄先生ゆかりの今治と松山の両市での記念講演をおおせつかった。初めての試みということもあって、今治市と松山市ともに、同志社各校の校友会・同窓会の方々をはじめ、私には神学部を卒業した牧師先生たち、キリスト教主義学校で教える懐かしい卒業生の方々の歓迎を受け、また周到な準備のおかげで、成功裡に終わり、楽しい思い出をもって帰京することができた。

そこで私がお話したのは、特に新島とは関係なく長年専門として研究してきたスイスの有名な心理学者カール・グスタフ・ユングと

その学問についてであった。今回はその中でも、男性と女性、父性と母性の元型についての最近の話題を中心に話そうと思っていた。やがて、自分の出番になって、私の名前や経歴が紹介され、それを聞いている内に、それまで実のところ全く私の意識になかったのだが、ある事柄が急に鮮明に思い返されてきたのである。「あ！そうだ！私がこのユング心理学に最初に出会ったのもボストンだったし、それも新島襄が勉強したアンドーヴァーの神学校であつたのだ」と。そのようなことが急にそれからそれへと思い起されてきて、なにか胸が熱くなり、それを押さえるのに心の中心では必死であつた。その講演は何事もなかつ

たように終了したが、京都への帰りの道でこれは一度ゆっくり考えてみなけりやなるまいと思つた次第である。

実は、この夏（一九九二年）何年ぶりかでまたボストンを訪ねていたのである。短い滞在であつたが、私がアンドーヴァー・ニュートン神学校留学（今日では新島の学んだ時代とは違つてボストンの郊外ニュートンにある）の当時には泊ることなど思いもしなかつたコブレイ・プレイスにある高層のメリオットホテルの部屋の窓から見ると、はるかにチャールス河にそつて大学や市街地が見えた。その美しくも懐かしい煉瓦色の建物や近代的なビルがなんとも言えず調和して、その姿をみるにつけ感無量なものがあつた。今回はコンウエルス通り二八三番のかねて馴染みのボストンのユング研究所に日本の心理学者の方々をお連れしての訪問で、研究所の講師で分析家のロバート・ボスナック博士とのセミナーを開くと同時に、郊外の有名なソローのウォールデンの森の近くにある先生の自宅にある夢の精神分析室などを見学するためであつた。しかし、その途中よつた、昔はうらぶれた古い家々の港のあたりも新しく開発されて、当時



ボストン市街をのぞむ

訪れたことのあるクインジイ市場などその時とは全く違って、水辺に広がる新生ボストンの町のたたずまいを改めて見直した。

最初、一九五八年にアンドーヴァー・ニュートン神学校に日本からはるばる汽船と汽車を乗りついて約一カ月もかかってボストン南駅に到着した頃の「わが懐かしのボストン」と較べてあまりにも異なっているのが驚いた次第である。そこで、どのようにしてこの町で生涯関係することになったユング心理学を

知り、この学問と出会ったかを改めて考えてみることにした。

一九五〇年代も終わりに近ずきつつあった当時、誰も日本ではまだ分析心理学とよばれたユング心理学を知っている人は、ほとんどいなかった。アメリカでさえも、紹介されてはいたが、まだ心理学としてはあまりにも神秘的であり、神学としては異端的であったこの深層心理学を専攻する学者の数は少なかった。アンドーヴァー・ニュートン神学校は今世紀の初頭から宗教心理学のユニークな研究プログラムをもっていた。例えば、後で私もとることになるボストン市立病院やマサチューセッツ州立精神病院での病院チャプレンとして全米に先がけての実習制度などであった。そして、その主任教授であったジョン・ピリンスキー博士は私がボストンについたその年にチューリヒのユング研究所での研究を終えて米国に帰国し、講義をはじめたところであった。忘れもしない最初の時間に彼のセミナーの講義を他の大学院生と一緒に聞いた。タバコの煙のもうもうと煙る部屋だった。どう言う訳か当時、精神分析をやるうかとするような人はみなパイプか葉巻をすって妙に

気取っていたし、おまけに足を机に挙げて教授の話聞いていたのには京都から行った私は最初にたまげた。少なくとも同志社の神学部で受けた教育の中にはそんなのはなかった。

一九五〇年代の終わりにから六十年代の始めはいわゆるアメリカの戦後の黄金の時代であった。まだ、ボストンを中心とするニュー・イングランドの宗教的な伝統は家庭や教会、神学校のキャンパスのなかには生きており、日曜日の礼拝は今週はハーヴァードのバトリックにするか、ボストン大学のチャペルのサーマンにするか、その選択に困るほどであった。時々イエール大学にいたラインホルド・ニーバーの様な大学者も来て、有名な説教家と競って説教し、それを毎週聞くのに忙しかつた。まだ、キャンパスにも安息日らしい雰囲気が残っていたし、金曜日はドレスアップして、教授と共に下級生の給仕でテーブルを囲む風習もあった。

そんな敬虔な気風とは対照的に、このピリンスキー教授引きいる心理部門はいっおう変っていた。彼の独特の強い訛の英語の発音に加えて、ユング心理学の特有の概念の使い方

にはまるつきり素養のない東洋から着いたばかりの学生には分るはずもなかった。

これは拙著「ユング心理学の世界」(創元社)にも書いたことだが、私は最初のレポートを白紙で提出したのを憶えている。そうしたら、彼が「アメリカの学生はわかったような顔をしているが、誰も分っちゃいないよ。とにかく座っていないさい、そのうち分るよ。」といって励ましてくれた。この助言は本当で、いまでもユング心理学が分らないといってくる学生さんたちに自分もこういわれたと話すことにしている。

この今は亡きビルンスキー教授には幾つもの思い出がある。彼はまたアメリカの神学校で、今日でいう死の臨床教育という病院に大学院生を実際に連れていって、病床を訪問させ、神学を頭だけの教義の教育でなくて、人間の具体的な苦難という状況の中でどのようなに役立て、人を実際に助けるかを教えた人である。神学がどうしても独善的になりがちなのを、苦しんでいる人の病床を訪ねることによって、どうしたらコミュニケーションできるか、どうしたら人は苦難のなかで神へ心を開くかのスーパービジョンを通してや、また医者や

看護婦さんたちの講義や指導を通して教えたのである。私はボストン市立病院で一般患者を、またウースターにあるマサチューセッツ州立精神病院では精神的な病をもつ患者さんと一緒に臨床牧会訓練という実地の教育を受けた。日本に帰国するとき彼はその病院付き牧師の協会に申請して全国どのプロテスタントの病院でも通用するチャプレン・スーパードクターの資格を私に与えてくれたし、夏の熱いボストンの市立病院で私他誰もその最後を看取るものもいなかった一人のアメリカの老人の死に立合っただけ、またその澄んだその目を忘れることはできない。帰国して同志社で始めた京都にある日本バプテスト病院での同様の訓練は今年でもう十七年目になる。それはそれこそ、その時の彼の教えの賜物であると今も思っている。

彼は厳しかったが、またパパ・ジョンと呼ばれ、優しい温かい人であった。後に、私が一旦同志社に帰って、こんどは本格的にユング心理学の研究にチューリヒに行き、やがて分析家の資格をとったが、その時一番喜んでくれたのも彼であった。

それから、今度はスーパードクターとし

て彼のもとで一夏アメリカの学生をもって教えたこともあるし、その折家族と郊外のウォータータウンに住んだこともある。昔はボストンの市街から学校のあるニュートンまで郊外電車が通じており、そして二度目に行ったときは廃止されていて、今回はまたこの電車は便利になって通じていた。このような行く度にボストンはいつも姿を変えて迎えてくれる。そう言えば当時学校の旧図書館の地下の陳列館には新島襄が勉強した時使ったという質素な椅子が置いてあったものだが、それはいまだここにいったのだろうか？

思い出は尽きることがない。今時々神学館の四階研究室の非常階段をでると、眼下に相国寺とあのニューヨークランド風のアーモスト館が目に見え込んでくる。まるでピーコン・ストリートがボストンからずっと続いているように錯覚する。私は時々人影のないこの場所であれ懐かしのボストンを偲んでいる。そして、どうしてマクドナルドやケンタッキーチキンがあるのに京都にはハーワード・ジョンソン(アイスクリームがうまい)がないのだろうか、と時折思ったりしている。

(大学神学部教授)